

「あんまり食うと太るぞ」

「むう」

唇をとがらせて、不満顔を作る。意識しないと、きつとうれしくて笑顔になってしまう。こんな口喧嘩が久しぶりでうれしかった。元の関係に戻ったみたいだ。これならいつかちゃんとジェットに想いを告げて、ジェットがわたしのことをどう思っているのか訊けるかもしれない。

「でもキーキ小さかったんだもん」

ヴァージニアの返事に、ジェットは大きなため息をついた。それもいつもの反応だ。大丈夫。もう元通りだ。

ヴァージニアはさらに続けた。

「わたしのことはともかく、ジェットはご飯食べなくていいの?」

そう言ったとたん、ジェットの表情に苛立ちが混ざった。

「お前……ッ」

ヴァージニアはジェットの怒りを感じて、びくっと震えた。どうしたんだろう? わたし、何か怒らせるようなこと言った? せつかく仲直りできたと思ったのに。

ふいに、ジェットの手がヴァージニアの頬へと伸びた。

真つ直ぐにヴァージニアを見ているジェットの顔が近づいてくる。

「——ッ」

ジェットは軽く唇を重ねただけですぐに唇を離し、けれ

ど離れることはなく囁いた。

「これ以上待てるか」

言われてヴァージニアは真つ赤になった。ジェットが求めてくれるのはうれしい、のだけれど。

「で、でも」

「逃がさない」

思わずヴァージニアが逃げ腰になるのをジェットの腕がヴァージニアの背に回り逃亡を阻止する。顔を上げさせられこれ以上話すなとばかりに、再び唇を塞がれてしまった。

抱き上げられ、ベッドへと運ばれる。

ジェットの手がブラウスのボタンを外し始めても、今度は抵抗できなかった。

全身にジェットの指先と唇が触れた。敏感な部分にされた時には気が狂うかと思った。力が全然入らなくて、ジェットの思うとおりに身体を開いてしまう。

口からは絶えず自分の声じゃないような甘い声もれてしまつて、止めようとしても止まらない。時折腰に押し付けられるジェットのものを感じ、その熱さにまた声が上がってしまう。

「ヴァージニア」

ヴァージニアの身体の秘められた花を指先で弄りながら、耳元で名前を呼ばれた。その掠れた声に、耳にかかる熱い息に、ジェットの指先が与えてくれる刺激に、身体が